



日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry : 略して JIFH) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981 年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、人財育成、海外スタッフ派遣、飢餓啓発などに活動を広げてきました。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、18 ヶ国 60 の協力団体とともに、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、現地パートナーと協力しあって、「こころとからだの飢餓」に応える働きをしています。

海外ワークキャンプ参加者募集中

今年 8 月、ウガンダとマレーシアにおいてワークキャンプを開催します。開発途上国における極度の貧困による様々な問題を学ぶとともに、活動現場でボランティアワークをします。参加を希望される方はお早めにどうぞ。

●キャンプの日程と主な内容

【マレーシア・ワークキャンプ】

期間：8 月 3 日(金)～ 14 日(土)

参加費：168,000 円 定員：10 名

(内容) ヌンパクビジョンスクールの子どもたちとの交流や学校建築、清掃作業のワークほか、市場見学等。

【ウガンダ・ワークキャンプ】※**残数名**

期間：8 月 16 日(土)～ 29 日(土)

参加費：338,000 円 定員：10 名

(内容) ナマスンビ村の学校での子どもたちとの交流、家庭訪問、教師用の建物やトイレの建設ワークなど。

使わない本は愛知事務所へ

「本 de リンク」を活用ください

愛知事務所では、使わなくなった本や CD やゲームソフトなどを集めています。届けられた本は、愛知事務所で買取店や専門店で換金し、飢餓と貧困に苦しんでおられる方々のために用いさせて頂いています。

●本 de リンク 3 ～ 4 月報告

本 806 冊、CD321 枚、DVD13 枚

ゲームソフト 20 本

換金額：22,698 円

東北被災地でワトトの歌声！

内戦やエイズで親をなくしたアフリカ・ウガンダの孤児たちで結成された合唱団「ワトト」のコンサートが当機構の主催で仙台市や石巻市で開催されました。次号で報告します。

ハンガーゼロ・サポーター大募集中！

今すぐ▶▶▶ 各種支援の お申し込み ができます!!

●まず右の必要事項に記入して、点線の枠部分を切り取りハガキに貼って、下記の大阪事務所宛に郵送、又はこの頁をコピーして、ファクシミリで申し込みください。確認のための必要書類等を送らせていただきます。
お電話でも申し込みできます。各事務所までおかけ下さい。

- ☐ ハンガーゼロ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ チャイルド・サポーター (世界里親会) になりたいので説明書 (申込書) を送ってください。
- ☐ 海外スタッフ・サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 1,000 円)
- ☐ JIFH (日本国際飢餓対策機構) サポーターとして協力します。
毎月 () 円 (1 円 500 円)
- ☐ 郵便自動引落し申込書を送って下さい。
- ☐ その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

フリガナ
氏名： _____ 男・女

〒 _____

フリガナ
住所： _____

(電話) _____

▼申込日： _____ 年 _____ 月 _____ 日▼

FAX・072-920-2155

2011 年 7 月に発生したタイの大洪水の被災者支援のために温かい応援をありがとうございました。

タイ洪水支援報告
最大被害地へ
衣類や食糧



衣類や食糧などの支援物資を配布しました。この住民の方々は自宅が浸水し水が引かなかったために、渡し舟を使って帰る必要がありま

したが、その舟に乗ることもできず、孤立状態にありました。

昨年 12 月には、パン・アキモトのパンの缶詰 100 ケースを配布し、地域住民の方々に大変喜ばれました。

今回の洪水被災者支援では、東日本大震災の支援物資倉庫で配布しきれなかった衣類も活用し、合計で 798,701 円の援助をしました。募金受付は終了させて頂きました。感謝申し上げます。

ハンガーゼロ・サポーター 2073 名。さらに運動をひろげていきましょー！



日本国際飢餓対策機構

2012 No.263

6

飢餓対策 News



ハンガーゼロ・アフリカの活動地の一つ南スーダンにあるルンベック・マブイスクールを訪れて (4,5 頁に記事)

東日本大震災に伴う福島原発事故で、飯舘村や川俣町等の人々が放射線被曝の危険から避難を余儀なくされ、1 年 3 ヶ月経った今でも、福島県出身の県外避難者は 6 万人を越えています。自分の住み慣れた居住地を、追い立てられて出ざるを得なかった人々の心情はいかばかりでしょう。避難や移動には相当の労力が要ります。肉体的な辛さだけでなく現状への困惑と将来に対する不安、同時に状況への怒りがこみ上げてくるでしょう。その際、そのしわ寄せが身体の不自由な人やお年寄り、そして子どもに來るのです。

日本国際飢餓対策機構 (JIFH) が進める「ハンガーゼロ・アフリカ」の現況が毎月の「飢餓対策ニュース」を通して報告されています。アフリカ・サヘル地域での干ばつは 5 才未満の子どもに深刻な栄養不良をもたらし、特に、ニジェールとナイジェリアだけでも、50 万人以上の子どもがいのちの危機にあります (UNICEF)。また、東アフリカ (ソマリア等) も同じ状況です。そこでは常に、食料と水を求めて住み慣れた居住地を後にしなければならない家族の姿があります。政治的な対立の中で、その流浪中に

犠牲となる大半が子どもであることを知るとき心が痛みます。

6 月 20 日は「世界難民デー」です。世界で飢餓に苦しむ人々が 10 億人となり、自然災害や戦争、抑圧等のために住み慣れた居住地を離れねばならない人々が 4370 万人 (2010 年末) に上ると言われます (UNHCR)。人は住みなれた土地で平和に暮らしたいと誰もが願います。この実現は、彼らの一人に、自分の食料と愛を分かちたいと願う一人が起こされること

住み慣れた居住地を追われて

から始まります。その志が一人二人と広がり、それらが本機構と現地パートナーを通して彼らとつながるとき、元の居住地帰還への希望が彼らに生まれ、あるいは、その置かれた所で安全と平安な生活への期待が高まるのではないのでしょうか。

「しいたげられる者のためにさばきを行い、飢えた者にパンを与える方。主は捕らわれ人を解放される。」

(詩篇 146 篇 7 節)

日本国際飢餓対策機構 理事 倉沢正則
(東京基督教大学学長)

■発行者 岩橋竜介

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構

Web サイトアドレス <http://www.jifh.org/>
e メールアドレス general@jifh.org

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイトで

身近に
便利に
なりました



- 郵便振替 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
- 他の金融機関からの自動振替 ●クレジット、デジタルコンビニ

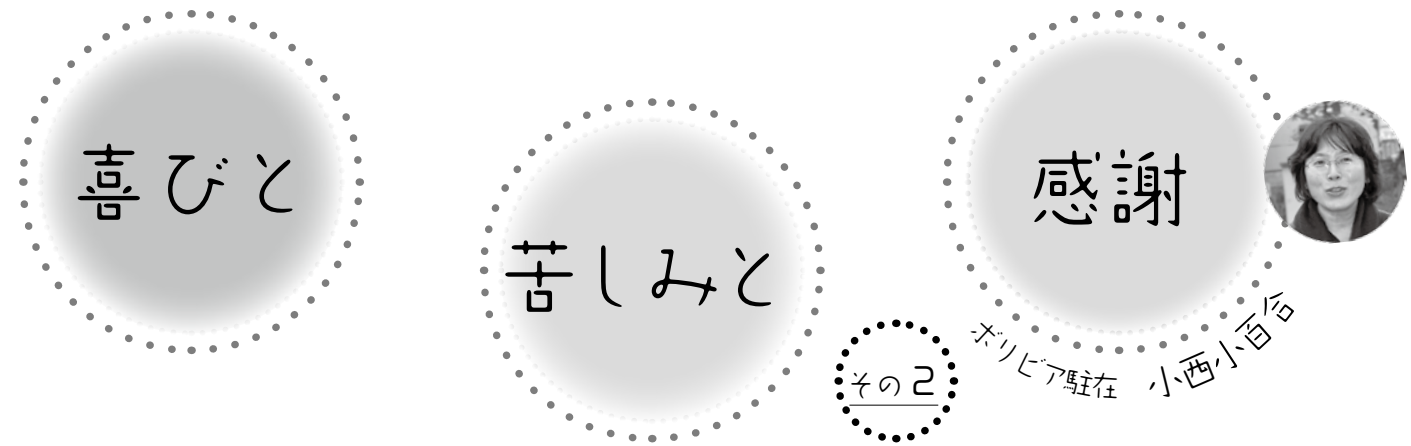
大 阪 〒 581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155
東 京 〒 101-0062 千代田区神田駿河台 2-1 OCC ビル 517 号室
TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782
愛 知 〒 466-0064 名古屋市中区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター 2F
TEL (052)731-8111 FAX (052)731-8114
広 島 〒 730-0036 広島市中区袋町 4-8 CLC ブックス 2F
TEL (082)546-9036 FAX (082)546-9037
沖 縄 〒 901-0156 那覇市田原 3-8-1 コリ香ハウス 201 号
TEL (098)859-4585 FAX (098)859-4540
東 北 〒 980-0012 仙台市青葉区錦町 1-13-6 エマオ 2 階 E
TEL (022)217-4611 FAX (022)217-6651

毎月、飢餓対策ニュースを皆様にお届けするために、ひばり障害者作業所 (八尾市)、生活愛、関西地区のボランティアの皆様が発送作業のご協力をして下さいます。

世界で飢餓に苦しむ人々のために、将来への希望をもって子どもたちが学校で学べるように、支援者の皆さんとともに当機構が取り組んでいることをさらに一人でも多くの方々に共感していただきたい、当機構の各事務所ではそのような願いをもって、各種のチャリティーイベントや学習会を行っています。今回は、大阪事務所職員が5月に行った取り組みをご紹介します。



振り付けを交えてオペレッタを演じるシオン児童合唱団



南米のボリビアに駐在して活動をつづけている、小西小百合スタッフへのインタビューの2回目。前回は異文化の中での苦勞について聞きました。

■ボリビアの新しい支援地について教えてください。

アサワニ地域は、チャヤから1時間ほど山奥の不便な地域で、チャヤと比べてさらに土地が狭いため人々は苦しい生活を強いられています。この地域では子どもが生まれると自分の畑を子どもの数だけ平等に分け与える習慣があり、子どもが増えるとそれだけ一人分の土地が狭くなるので、作付面積が少なくて生活できなくなり町に移住してしまうことが多いのです。

以前からアサワニとリオカイネの人々と政府からJIFHに、地域や子どもの教育支援の要請がありました。それを受けて現地を訪問、調査し、地域の人々と話し合った結果この二つの地域での世界里親会の活動開始を決定したのです。

この二ヶ所のセンターでは、私が直接子どもに関わるというより現地のスタッフたちが働きやすいように、様々な調整や改善のサポートをするのが私の主な役割だと考えています。

なんといっても子どもたちが学校で勉強できるようになるには、里親さんのご支援が必要です。ぜひご協力下さいますようお願い致します。

■JIFH世界里親会のボリビアでの12年間の活動のうち小西さんは5年以上関わったわけですが、どのような成果がみられたのでしょうか。

以前は小学校にも行けなかった子ども、特に女の子が高校を卒業できるようになったこと、そしてさらに大学で勉強する子

とFHに依存していた人々が、自分の村のために自分達でやっているんだという意識が高まってきて、地域政府にかけ合い、共に協力して様々な点で地域改善をしていこうと努力されるようになりました。

■その間あなた自身は変わりましたか？

はい。以前に比べて他の人や自分の弱さ、足りなさ、またそれぞれの違いなどを受け入れられるようになってきたと思います。前回話したように、文化の違いや人間関係などさまざまな葛藤が起こる中で、ひとつひとつ嫌だと思い始めると先に進めなくなります。人間である限り誰にでも弱さはある、お互いに歩み寄りながら今していることを改善しつつ自分にできることを継続してやっていこう、と思えるようになりました。

そんな私が、貧しさの故に基本的な教育も受けられなかった子どもがFHのプログラムを通して成長し、自分の可能性を見出してビジョンをもって生きようになるのを見させていただける、一人の“ひと”の人生に深く関われる喜びを与えられたのですから感謝です。



が出てきたように、女子教育に対する地域の人々の考え方・価値観が変わってきたことが大きな成果の一つと言えます。2001年にチャヤに初めて高校ができ、翌年には遠距離で通学できない子どものために学校寮が出来たことも大きな励みになりました。また最初は何か



ボリビア報告で民族衣装も披露し皆さん大喜び

団体です。とくに昨年の東日本大震災では、大量の緊急支援物資をJIFHの活動現場に届けてくださいました。

シオン児童合唱団の子どもたちは、幼稚園児から中学生までで構成されたキリスト教会所属の児童

合唱団で、毎年春に定期コンサートを行うほか、老人ホームや病院などへの慰問活動を通じて子どもや高齢者との心の交流を続けています。

普段は食事や談話をする場となるレストランに設けられた特設ステージで、合唱団の子どもたちが美しいコーラスで讃美歌や唱歌を歌います。懐かしい歌の時は、高齢者も歌を口ずさむほほえましい姿がありました。後半の聖書の例え話「四つの種」を題材にしたオペレッタでも、熱演する子どもたちの演技を喜び、ときに笑声が会場に響いていました。

最後にボリビア駐在小西小百合から、ボリビアでの活動の様子を写真や民族衣装の披露を交えて行われました。その中で、日本からは想像できない貧しさの中で、希望をもって歩み出している子どもたちの成長の様子や教育の機会を与えることの大切さが語られ、また支援参加へのお願いもさせていただきました。

同上野芝の高田千加ホーム長は「ホームの皆様にとって、今回のように子どもの公演を鑑賞する機会はそんなに多くはありません。本日はとても楽しんでいただけた

と思います」と言ってくださり、今回の企画運営の遠藤真理子さんからは「すばらしいコンサートでした。皆さんが喜ばれているのがよくわかりました。私たちの他の施設でも実現できればと思います」との感想をいただきました。

「自分らしく、より楽しく、意味のある生活を送る」という独自の介護手法を取り入れて、国内外で社会福祉事業を幅広く手がけるロングライフとの協同企画は今回が第一弾、今後も飢餓問題の解決のために手を取り合っていきたいと願っています。高齢者の皆さんにとって、孫ともいえる世界の子どもたちに、豊かな愛の輪が広がっていくことを期待します。

当機構の各事務所では、ハンガーゼロ実現のために、支援者の皆さまとともに、各種の活動に積極的に取り組んでいきます。

「チャリティーでコンサートやバザーをしたい、講演会をしたい」などなど皆さまからのご提案がありましたら、最寄りの各事務所までご相談ください。



ロングライフではハンガーゼロ自販機も導入済

当機構は、ハンガーゼロ・アフリカの活動として、南スーダン・ルンベック・マブイ学校で給食支援をしています。さる5月に同地を訪れた清家弘久（常務理事）が現地の様子を報告します。



子どもたちが平和を味わえるように [学校教師]



毎朝、歌いながらの行進でスタート



給食は日本のレストラン（支援者）からの応援で



近隣住民も利用するクリニック

年生が当初予想していたよりたくさんの子どもたちが集まっているので、教室が足らず、1クラスは木の下での授業です。教科書はなく、先

ころに公立学校がありますが、学校に行っていない子どもたちが多く、このような子どもたちに教育の機会をと創立されました。初めは校舎もなく、すべて青空教室でした。そこにLIAの支援が始まり、現在は校舎も建てられました。その後JIFHがLIAに協力、ハンガーゼロアフリカの取り組みとして給食支援を始めました。給食は学校教育にとって欠かせません。もし給食がなければ、午後の授業はできなくなり勉学が進みません。多くの低学年の子どもにとってこの給食が一日のうちで唯一の食事になっているのです。主にこの給食の応援をしてくださっているのは東京の永田町にある「黒澤」というレストラン。毎月お客様の数だけマブイ学校の給食支援をしてくださっています。

この日の給食はソルガム（モロコシ）の粉で作ったおかゆと、豆のスープ。お母さんたちが朝から準備して作られたものです。子どもたちは楽しんで食べるというより、生きるために一生懸命食べているという感じでした。私たちのために用意してくださった食事本当に質素なものでした。この地域も食料の確保に非常に厳しいという印象を持ちました。

日本の皆さんの手を貸して！

「この国は50年以上北のスーダンと戦争をしています。戦争の中で生まれ、戦争の中で生き、戦争の中で死んでいく、本当の平和を知らずに……そのようなスーダン人がほとんどです」

私たちがルンベックを離れる日の朝、聖書とお祈りの時間に、学校で働くスタッフが語ってくれた言葉です。そして「日本の人々に南スーダンの厳しさを知ってほしい。そして子どもたちが『平和』



マブイ学校、LIAのスタッフらとともに（中央に清家）

を味わうことができるように日本の皆さんの手を貸してほしい」と結んでいました。

ハンガーゼロの取り組みはまだ陰しく厳しいものですが、一人でも多くの日本の皆さんにハンガーゼロの輪に加わっていただき、真の飢餓をゼロにするためにご協力をお願いします。

南スーダン ルンベック・マブイスクールで見た現実

世界で一番新しい国家、南スーダンは昨年樹立されたばかりの国ですが、北のスーダンとの抗争は50年以上続いています。二度の大きな内戦を経て自立した国家作りの道を歩み始めましたが、石油の利権をめぐり私たちが訪問していた間も空爆がありました。

首都のジュバ（政府は新首都の場所を探しており、近年中に遷都の可

能性あり）は南スーダンでも南の方に位置します。首都といっても全てが全く一から作られています。道路も舗装されているところは限られており、穴だらけ。政府機関の建物も仮宿状態。もともと小さな町が一国の首都になってしまったために、インフラ（社会基盤）整備は遅れに遅れています。現在郊外で日本の自衛隊が国連PKOとして道路作りをし

ています。

ジュバから400kmほど北西に位置するのがルンベックという町。私たちはそこまでWFP（国連世界食糧計画）のセスナ機に乗って移動しました。夕方なのに乾いた暑い風がまとわりつきます。空港から10分も行くとJIFHが支援するマブイ学校があります。ここはLIA（ライフ・イン・アバンドンス）南スーダンが支援する学校です。学校だけではなく、隣にはクリニックもあり、地域の人々のためにほぼ無償の診察が行われています。

懸命に学習する子どもたち

学校には現在1年生から4年生まで300人が学んでいます。朝、子どもたちが学校に到着するとすぐに整列し歌を歌いながら行進をします（規律を学ばせることが目的）。その後、子どもたちはそれぞれのクラスに分かれ勉強が始まりますが、1



教室不足で1クラスは青空教室となりますが、子どもたちは集中して学んでいました

愛・信望館が誕生

「南三陸町を支えるキリスト者ネットワーク」が、このほど地域の人々の交流拠点となる「クリスチャンセンター愛・信望館」を開設しました。（以下＜愛・信望館＞）当機構は、同ネットワークの中澤竜生代表（牧師）と協力し、被災者による仮設店舗「さんさカフェ」（本紙3月号に記事）の拡張工事のためのボランティア派遣や資材の提供、森祐理親善大使による慰問コンサート（心のケア）の運営支援などをしてきました。今回は中澤氏に、愛・信望館が生まれるまでの経過を報告していただきました。（JIFH広報）



完成間近の愛・信望館 6月8日に開所式が行われます

震災から一年が経過しました。

「命を救う」から「命を守る」そして「命を生かす」へと進んでおります。ですが、その願いも空しく「命を粗末」にする人がおります。その理由は「希望がない」「失望」という言葉です。人生誰もが必ず体験することですが、被災地ではそのような思いを抱いた方が多くおられるのです。そして「希望がない」という理由のニーズに応えるのは実に難しいことなのです。

また、悲しいことに震災から一年が経過して心労と身体の疲労がたまり、倒れる方も多くいま

としては、声を掛けることも難しく空しく感じるのはです。それでも、心をこめて明るく挨拶することから始めます。その繰り返しは無駄ではないことが分かります。

「ですから、皆さん。元気を出しなさい。すべて私に告げられたとおりになると、私は神によって信じています。」（新約聖書）愛・信望館は、その拠点です。

「このセンターで何をするのですか？」とよく尋ねられます。はっきり言って、何かは明確ではないのです。何故なら被災地ではいつも変化があり、様々な要望があるからです。ですからセンターは様々な変化に適応する存在であり、一人暮らしの方が「孤独死」として発見されます。家族が震災後、突然に召される現実

は、とても厳しいものがあります。そして、私たち現場にいるもの教会であり、コミュニティーセンターでもある『愛・信望館』は、見栄えも良くなければなりません。何故なら常に瓦礫が一面に広がっている場を見ているのは心が萎えるものです。少しでも目で見える「安らぎ」を提供する場となります。そして、私たちのために日本国際飢餓対策機構のメンバーも奮闘しています。建物によって励ま

しを与え、そこにいる人々はさらに大切な役割を果たせるよう、十分な心配りができるよう、常にセンター長（梅谷ちから氏）はミーティングを行っています。

寄り添うをテーマとして

先日「母の日」にあわせて、6月に行う愛・信望館の開所式の案内を近隣の仮設住宅に配りました。そうしますと「ぜひ参加したい」「あっ！今工事しているところですね」という声が即聞こえてきました。これはひとえにクリスチャンたちの連携による結果であったと思うのです。復興に携わることは個人だけでは難しいものです。しかし、クリスチャンが手を取り合って協力し合えば、不可能が可能を生み出します。

南三陸町を支えるキリスト者ネットワークは「寄り添う」をテーマに人々と関わり、今回のセンターを設立するまでに到りました。次の目的は「南三陸町歌津に教会を建てる」です。皆様のお祈りとお支援をお願いします。

（報告・中澤竜生）

》》ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング 参加感想文《《

「貧しさゆえに弱者とされる惨めさを思い知った」

当機構は将来、開発途上国で活動を考えている人や国際協力に関心がある人を対象にした「ハンガーゼロ・ファシリテーター・トレーニング」（旧称 オリエンテーショントレーニング）を3月中旬、千葉の東京基督教大学で開催しました。今回は9名の方が参加されました。その中から慶應義塾大学生の駒板さんに感想を寄せていただきました。

今回のトレーニングで印象に残っているのは、開発現場における権力者と弱い立場にある貧困層



の人々としてチームに分かれ、村の生活改善のために議論するというロールプレイゲームです。貧

困チームに入った私達は電気も消された中床に座り、必要なものを絵で描きましたが、権力者チームから村の開発計画を言い渡され、反論する余裕もなく不

平等な条件を呑まされました。その時私は、貧しさゆえに弱者とされることの悔しさ、惨めさを（ゲームとはいえ）初めて思い知らされました。

その他にも、地面に座ってソマリア料理を手で食べるなど、途上国の生活を模擬体験することができました。世界中で多勢の人が貧困にあえぐ中、「神を愛し隣人を愛しなさい」という教えに従うクリスチャンとして豊かな日本に暮らす私たちには、大きなチャレン



ジが課せられていると思います。自分のことばかり考えずに他者に関心を寄せる時、かき消されていた呻きが聞こえ、確実な変化を起こすチャンスが生まれる。

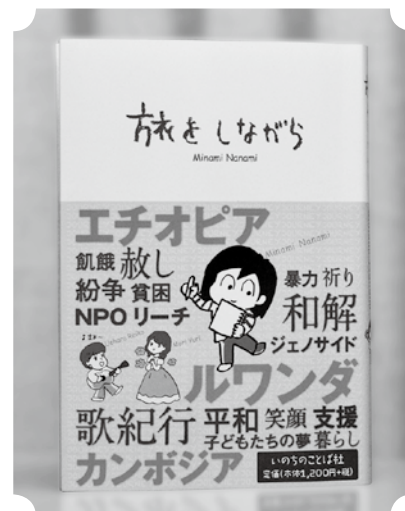
「愛の反対は無関心」というマザーテレサの言葉のように、私たちは、世の塩（キリストの山上の垂訓）として外に出向き、他者を愛し、分かち合う使命が与えられていることを、今回の学びを通して知ることができました。

（駒板菜穂子）

みなみなみ

新まんが本

「旅をしながら」ができました！！



「旅をしながら」 四六判 192頁

「子どもニュース」でおなじみのみなみなみさんの新しいまんが本ができました。

当機構の親善大使・上原令子さんと森裕理さんが訪問したエチオピア、カンボジアで、そしてみなみなみさんが訪問したルワンダで、見てきたこと、聞いたこと、考えたことが楽しいイラストとまんがで紹介されています。

この本は旅行記として現地の事情を知るのに面白いだけではな

く、3人が体験を通して感じたこと、教えられたことが赤裸々に描かれ、まんがを通して飢餓、貧困の中で暮らすとはどういうことなのか、私たちはどのように支援をすればいいのか考えるヒントも与えてくれます。また平和の大切さと赦しについて深く考えさせられる本でもあります。当機構の協力団体キングダム・ビジネスからも購入できます。

【いのちのことば社】1260円（税込）



内外装工事を行うJIFH大工ボランティア